



知性による
精神世界へのアプローチ
(未完)



第一章 倫理、理想の根拠はどこに求められるのが適当であるか

第一章 倫理、理想の根拠はどこに求められるのが適当であるか

「人間として生まれた私は人生をどのように過ごすべきなのだろうか？」

この疑問は自我を意識するようになった若い頃などに誰もが一度は抱いた経験があるのではないかと思います。この疑問について知性が思考する場合には「人間はどのように生きるべきであるのか？」という問いを自然とそこに含ませているように思われます。そして、これをよく眺めてみますと「どのように生きる“べき”」という言葉がありますが、これは、『人間が活着ている』という現象には何らかの目的が定められているのではないかと問うことでもあると言えます。もしそうでないとするならば、「人間はどのように生きるべきか」ということについて考え出される様々な理念は、私という個人が自分および他者に対してなす単なる個人的な要求にすぎないということになってしまいかねません。

これに対して、「『いかにすれば人々が安全な社会秩序を形成できるのか』、『いかにすれば人間という種を存続させていくことが可能なのか』等の問いからはじめの疑問を私は抱いたのである。私は『人間が活着ている』ということに目的があるとは考えていないが、この疑問に対して考え出された理念は人類にとって有益性が認められる限りにおいては単なる個人的な要求だとは思わない」という異論が出ることも考えられます。

それでも、このような異論においても『人類に有益な何かをもたらすという目的は個人が勝手に作り出した要求ではない』という事が認められているのを見出せるのではないかと思います。すなわち、自覚されずとも、その目的が定められていると暗に語られているのです。

「しかし理念が、他者とお互いに有益性を認められるような性質をもち共有できるものである場合、そこには道徳的な合理性を認めることができるだろう。その点によって『単なる個人的な要求ではない』と見做すことも可能なはずだ」と答えが返ってきたとしても、この回答自体が次のような主張を前提にしていることを見出せるはずでず。「理念が道徳的に合理的であるかどうかを判断するための基準は、それが不変であるか否かは判らないが、私が誕生する以前から既に設けられている。そして、人間がその基準に沿うように努力することを、自分が誕生するずっと以前から『人が生きる』ということに定められている目的の一つとして容認することに、私の道徳感情は満足を感じる。」

このように、はじめの疑問は「『人間が活着ている』ということには何らかの目的が定められているのではないかと？」という問いと切り離せないものであるということが判ります。

ここでもし、「『人が活着ている』ことに何らかの目的が定められていると考えるのは、人間が自分たちを慰めるために作り出した迷信にすぎない」と考えるのであるならば、はじめの疑問について考えることも同様に虚構の中に慰めを求めるような単なる戯画でしかなくなります。すなわち、「人間はどのように生きるべきか」という問いに対して考え出された理念も客観的な根拠がない空虚な倫理になってしまいます。つまり、「『人間が活着ている』という現象には何らかの目的が、もしかしたらそれは人類を俯瞰した際に初めて達成が望めるような類のものなのか

もしれないが、いずれにせよ実際に定められているのだ」と認めるのでなくては、倫理や理想が単なる観念にすぎないものに墮してしまわざるを得ないのです。

これは言い換えれば、倫理や理想の根拠はその定められている目的の内に求められるのでなくてはならない、という事です。そしてまた、倫理や理想を現実的なものとして受け入れるためにはその目的を“実際”に見出す必要がある、という事でもあるのです。

その目的を“実際”に見出すためには、「その目的を抱いている精神が現実存在する」という前提に立たなくてはなりません。そして、この前提を受け入れるためには、その精神の存在を現実の世界の中から探らなくてはなりません。目的とは、何らかの存在に内在する精神が抱いている動機であり、主観において体験される内面的な内容です。つまり、精神が存在しないところに目的だけが単独に存在すると考えることはできません。それゆえ、人間という事物を生み出したこの宇宙それ自体の中に内面性を探ることを否定する場合、倫理や理想の現実的な根拠が見出されずに、これらは単なる観念にすぎないものか、あるいは自分や他者に対する単なる個人的な要求としてしか機能できなくなります。

反対に、現実のこの宇宙とは全く関わりを持たないところに『人間が生きている』という現象の目的を定めた精神の存在が想定されることもあります。この場合、倫理や理想の根拠を現実と結ぶ糸口が予め否定されることとなります。そのため、いくらその精神存在を探ろうとしても、倫理や理想を現実的なものとして受け入れる可能性は既に失われており、この場合も結局、観念の域を超えることはなく、極端な場合には現実を拒絶する態度に至ることもあり得ます。

以上より、はじめの疑問は「人間という存在には生きる間に達成しようと努力しなくてはならない使命が何者かによって与えられているのではないだろうか？もしそうであるならば、その使命とは一体何なのであろう？」と言い換えることができます。なお且つ、倫理や理想を現実的なものとして受け入れるか、単なる個人的な要求にとどめてしまうのかという問題は、現実のこの宇宙の中に人間に使命を与えた内面性を探し当てることができるかどうかにかかっている、とも言えるのです。

第二章 一般に浸透している世界観に内在する諸問題

現代の教育によって与えられた概念から形成された世界観は、この宇宙に精神が内在すると考えることに非常に大きな抵抗を生じさせます。現代の自然科学と宗教はますます統合される可能性を失い、人間がもつ想像力によってほんの一部分において両者を結ぶ糸を僅かながら予感することができる程度でしかないのが現状だと思います。また、現代の私達の多くは、現代の自然科学および数学の思考方法のみが客観的な真理を見出すことができる、と信じ込んでしまい、世界に対するそれ以外の考察のやり方は主観が作り出す個人的な思想でしかないと考えています。それゆえ、諸宗教に対して知性はそれを人間が自分たちを慰めるために作り出した非現実的な妄想としてしか受け止めることができずにいます。宗教は、感情の中で脈打つ信仰に対する情熱と、教義の中に一部知性によっても道徳的な合理性が認められるということによって、漠然と何とか支えられている状態であるように思われます。

このことから、この宇宙に内在する精神を探し出すためには、それを妨げている現代科学に基づいた教育によって与えられた世界観から、まずは自分自身の思考を自由にしなくてはならないことが判ります。この論文は盲信的にならずに理性に基づきながらまさにこれを達成することを目標としています。

そこでまず、この章では教育によって与えられた現代科学に基づいた世界観に潜む論理的におかしなものを提示していこうと思います。そのことによって、現代の自然科学の思考方法のみが客観的な真実を伝え得る、という知性の思い込みから自分の思考を解放する可能性を見出せると思うからです。

そして次章以降において、理性に基づきながらこの宇宙に内在する精神を探求するために、現代の自然科学的な思考方法とは異なる別の考察方法について示していくつもりです。そして、そこからも客観的な真理を見出し得る根拠を提示することで、現代科学に基づいた世界観とは異なる観点にも個人個人が自由な意志の上で自分自身の理性に基づきながら立てるようにできたらと思います。

その前に、現代科学に基づいた世界観がなぜこの宇宙に精神が内在すると考えることに抵抗を生み出すのかをまずは明らかにしておきたいと思います。

現代科学によって提供される諸概念から私達の多くは次のような印象を抱くのではないかと思います。

「我々が認識する宇宙は単位的な微小な粒子もしくは波のエネルギーと相互間に働く力から構成されている。仮説としてならば超弦理論等もあるが、それらも上の観点から考え出された解釈モデルの一つである。そして、粒子もしくは波と相互間に働く力に即した観測可能なもののみが客観的に宇宙に実在するものとして容認することが知性には許される。なぜなら、有機物であっても無機物であっても物理法則に従っている粒子や波以外が発見されたことは未だないし、これまで観測可能な現象はすべて物理法則によって説明できるものであった。それゆえ、『粒子もしくは

は波の空間的な配置と運動こそがこの宇宙の姿なのであって、すべての現象は粒子や波の純物理的な運動の結果として偶然生じているにすぎない』と考えるのが、新たな構成要素を想定する必要性が数学的に認められてそれを証明する再現性のある現象が観測されない限り、知性にとっては自然であろう。

また、生理学や解剖学の本を開けば、およそ次のような見解がよく見られる。

『肉体の感覚器官に対する外界からの物理的な刺激により、まずその感覚器官において受容器となる感覚細胞に活動電位が生じる。そして、神経細胞におけるその興奮がいくつかのニューロンを介して大脳の各感覚野にまで伝導、伝達される。認識はこのそれぞれの感覚に対応する各感覚野からの情報が脳連合野において統合されることで生じている。』

更に、神経系、特に脳に傷害がある場合、傷害された部位に対応する感覚に異状や幻覚、あるいは消失が認められている。脳に障害がある人においては障害のある部分に対応している思考や記憶などの精神活動に異常が見られることもある。

これらの見解を踏まえるならば、意識もまた、脳と呼ばれる空間上における粒子もしくは波の機械的な運動によって副次的に発生していると考えられる。すなわち、人間や動物の意識もやはり粒子や波の機械的な運動の結果として偶然生じている現象のひとつに変わりないのである。」

私達の道徳的な感情がどんなに抗おうとも、知性は自らの本性に従って世界というものに対するこの印象を認めざるを得ません。現代科学によって見出された個々の法則性とそれを応用した科学技術の現実に対する有益さがこの印象をいっそう根深いものにしています。

この印象は「『すべての現象は粒子や波の純物理的な運動の結果として偶然生じているにすぎない』と考えるのが、新たな構成要素を想定する必然性が数学的に認められてそれを証明する再現性のある現象が観測されない限り、知性にとっては自然であろう」と述べることで、機械的な性質のみが真理として知性に受け入れられるように条件付けています。たしかに、不可視のもの、観測されないものを無批判的に容認するのは知性には相応しくないでしょう。しかし、この条件付けによって、精神といった非物質的なものについての真理を受け入れる可能性が知性から退けられてしまっていることも見て取ることができます。

また、宗教には、教義を無条件に受け入れるように精神に要求し、自分自身で判断する個人の自由を奪いかねない在り方をしているように見えるところもあります。そのため、宗教性を帯びた内容に対して私達は、個人の精神の領域が侵されるのではないか、という心配を少なからず抱くようになっていきます。知性は何らかの命題を無条件に受け入れることは自らの本性には相応しくないと感じます。そして、自分自身で厳密に吟味した上で普遍性のある論理的で確からしいもののみを真理として容認するように私達を促します。知性は宗教が語る世界観について、普遍性のある論理的で確からしいものとして容認する為の根拠をほとんど見出せずにあります。それゆえ、教義を無条件に受け入れるように強要されているように感じ、宗教を自らの本性に対立するものと見做さざるを得ないでおります。

加えて、現代科学に基づく世界観は宗教が語る世界観に対して次のような印象を持ちます。「神や仏や天使が存在するとする確かな証拠はこの世界のどこを観測しても見出すことはできない。観測してきたものを見る限り物質は原子を支配している物理的な法則性に従っている。神

や仏や天使という存在がいようがいまいが、やはり世界は変わらず物理的な法則に従って進行していくであろう。我々は誠意をもって現実に即しているつもりだが、この世界に神や仏や天使という概念を加える必然性は見つからない。また、それぞれの宗教が語る世界観は異なっており、どの世界観が真実なのか特定するための根拠も見出されていない。それなのに宗教は確かな根拠も示さないままその世界観を我々に信じるように要求する。それゆえ、そのやり方に対して『それは妄想でできた誤謬の世界に引きずり込むかもしれない不遜な行いである』と我々は言わざるを得ないのだ。」

以上のようにして、宗教を非現実的な妄想と見做す現代科学に基づく世界観は、この宇宙に精神が内在すると安易に考えることに対して大きな反感と蔑みの感情を生じさせております。

反面、現代のこの世界観は、「どんなに私達が人間の魂を尊いものとして見上げたいと思っても、自分たちの魂の本質は肉体に依存しているというのが真実なのかもしれない。肉体の死と共に自分自身の意識も使い捨てられるように永遠に消滅してしまうというのが本当なのかもしれない。」という不安を人間の魂に植え付けます。そして、私達の感情に「それならば、自分が存在していることに一体どんな価値があるというのだろうか？」と悲観的な暗い影を落としています。

更に私達は、「『私』という精神はどのような存在なのか?」、「なぜ『私』は存在するのか?」といった自分の中にある疑問を満足させてくれる要素を現代の世界観の中から引き出せずにあります。そればかりか、この観点からは引き出せる可能性は期待できないと考えるようになりつつもあります。それゆえ、私達は自らを含めた人間の精神の価値を肯定するための確かな根拠が解らぬまま、その価値を何とか信じざるを得ない状況の中にいます。

私達は人生のなかで、この不安と暗い感情に負けないように、漠然とした道徳的感情や情熱で立ち向かったり、意識にのぼらないように別のところに注意を向けたりと、様々な手段で抗っております。加えて、人間の意志が自然科学がもたらす世界観によっては明らかにしがたい様式をしている為、この世界観に完全に呑み込まれるという事もなく生きる事ができています。

しかし、現代科学に基づく世界観について更に考察を進めると、そのなかには腑に落ちることが決してないものが内在しているということに私達は気付きます。

この世界観を踏まえるならば、私達人間の意識が感覚を認識する際、まず意識化される前に外界からの直接的な刺激は受容器で一度電気的な情報に翻訳されることとなります。それから更に脳で知覚内容に変化させられたものが主観の中で『私』という自我に感覚として受け取られているということとなります。つまり、私達が実在する世界として信じているものは、世界からの情報が少なくとも二重に変化させられた結果として主観の前に現れているというのです。そのため、私達の目の前に広がっている世界は、世界の真の姿そのものではないし、世界についての純粋な情報とも言えないということになってしまいます。また、私達の感覚には錯覚が生じたり、脳や神経が傷害されることで異状や幻覚が生じたりします。更には、現代科学は「この宇宙を構成する原子は、陽子や中性子や中間子からなる原子核の周りを電子が回っている構造をしており、両者の間の空間にはこれらの量子の大きさに較べ膨大な隙間が存在している。つまり、私達が目

で見ているように物は実体で満たされているのではなく、本当は質量をもっている部分はほんの僅かでほとんどすべては隙間なのだ。」と語ったり、「蛍光灯は実際には非常な速さで点滅しているが、私達の目は、たとえ健康的であったとしても、ずっと点灯し続けているように知覚する。」と語ったりしています。このような事情から、感覚に誤謬が紛れ込み得ることは否定できず、私達の目の前に広がる世界は実は真実の姿からは程遠い可能性があると考えられるのです。

よって、脳によって生み出されている意識が認識するものはすべて脳や神経系に依存するため、意識の中に世界の真実の姿が直接現れることは決してないと考えられます。そして「自分の認識は真実の世界と何らかの関係をもっているようだ」ということしか語ることができなくなります。そのため、確かに私達人間は目の前の世界を貫く法則性を見出せますが、その法則性はどれも「世界の真実の姿と関連があるようだ」という範疇にとどまらざるを得ません。このようにして世界の真実の姿について確かなことを知ることは一切諦めなくてはならなくなります。

以上の思考を経たのち、私達は次のような帰結に至ります。

「人が現実として信じている目の前に現れているものは、真実の世界に関する何らかの表現と、感覚に紛れ込んだ誤謬である幻覚から成り立っている。しかし、世界の真実の姿について我々は確かなことを知ることはできないため、この両者を正確に区別することは不可能である。よって、常に騙されている可能性は完全に払拭されることなく一生我々に付きまとい続けるだろう。確かな真実に触れることは我々には永遠に叶わぬ夢なのだ。」

この帰結は意識に映るものすべてを懐疑的なものに還してしまいます。そして、私達はあたかも一種の夢か幻のようなものの中に閉じ込められているかのような印象を作り出してしまいます。しかしこの帰結にいたる経過自体に目を向けてみますと、この経過はまず「目の前に机が知覚されているのだからそこに机があるのだ」というように、感覚という認識内容を所与のものとして、現実の世界の姿として信頼し根拠として無条件に容認するところから出発しております。それから、そのような認識内容のうち他者と合意できる事態や、現象に即した機器を用いて実験や観測ができる事態を客観的な事象として規定するようになります。そうして観測機器から得られたより正確な値に基づく実証により再現性のある解釈モデルを客観的な事象に加えていきます。先の帰結は、この観察態度を自然現象のみならず人間自身にも拡張させて探求した結果得られたものです。ところがこの帰結にいたるまでの間において、始めは感覚として知覚された内容を根拠にしていたのにも関わらず、途中からそこから得られた見解を論拠として始めの根拠とすり替わってしまっているのを認めることができます。そのため、始めに根拠となっていた知覚内容が懐疑的なものとして扱われてしまって一貫した観点に立つことができず、論理としての破綻が垣間見えるものになっています。

それでも、厳格に現実に忠実であろうとした結果この帰結に至ったということも事実です。現実こそ最も誤謬と妄想が入り込む余地が少ないところとして根拠を据えていたのにも関わらず、現実の中に確かな根拠を据えることができなくなってしまった今、すべてのものに常に不確かさの刻印が付きまとうようになります。こうして、根拠として据えられるようなものがどこにも見出せなくなるという事態に陥ってしまいます。

以上のように、現代科学に基づく世界観は論理の破綻に至ってしまい、自ら生み出したまどろみから脱け出す術を見つけられずに「私達が認識するものはすべて不確かなものでしかない。」という感情を深めさせるものになっていきます。これが現代科学に基づく世界観に内在する論理的におかしなものの代表的なものです。

このまどろみは根拠として据えることが可能なものを見失っているがために生じております。そして、人間が思考という精神活動によって現実において応用可能な法則性を見出すことができることを認めているのにも関わらず、「『すべての現象は粒子や波の純物理的な運動の結果として偶然生じているにすぎない』と考えるのが、新たな構成要素を想定する必然性が数学的に認められてそれを証明する再現性のある現象が観測されない限り、知性にとっては自然であろう」と語ることで精神といった非物質的な概念の中に根拠を求める可能性を閉ざしているがためにそこから脱け出すことができないでおります。

ここでもし、思考や感情や意志などの人間の内面のうち最も観察のしやすい思考を採り上げて「思考活動の原因を脳における物理的な現象に還元するのは妥当ではない」ということを示すことができたとします。そうすれば、人間の意識について物理的に観測できるもののみに基づいて解明しようとするに妥当性は認められないことになり、「人間の意識は脳と呼ばれる空間上における粒子もしくは波の機械的な運動によって副次的に発生している」という論理も成り立たないものにならざるを得なくなるでしょう。その際、精神という非物質的な概念を想定する必要性を数学上の思考様式に立とうと試みながら示すことで、精神という概念を導入することを理性によって可能なものと見做すこともできるはずですが、そこで、これからこのことについて考察をしてみたいと思います。

まず、思考活動において人間の意識が認識する表象が、物理的に観測される対象である物質的な事象のみを原因として生じているものであると仮定します。そうすると、人間の思考という現象は少なくとも脳または人体という有限な広がりをもつ空間内における物質的な事象のみに起因する、と言わねばならなくなります。つまり、思考において認識され得るすべての表象に対応した各物質的な事象が人体領域内に見出されなくてはならないということになるのです。そこで、恣意的に物質的な事象に神秘的な概念を全く付加させることなく真にすべての表象に対応した各物質的な事象を分析できたとしてみます。この時、それを構成する物質の構造のそれぞれの型、あるいは運動の状態の各形式について、たとえ抽象的にであっても、すべてのパターンが提出されている筈です。ところで、濃度勾配や電位勾配に対して静止電位を維持する場合を除いては細胞の活動は基本的に受容体に物質が受け取られることによって引き起こされ、また、活動電位は全か無かの法則によって生じます。よって、表象に対応した各パターンが関数として表わされていたとしても、その変数は連続的な集合ではなく自然数的な集合であるはずですが、人体という有限な空間内においてはこのパターンの数も、天文学的な数になるかもしれませんが、有限数であると言えることができます。そのため、私達の思考にはその性質上、これらのパターンについてのすべての表象を形成し、一つ一つを区別して判断することが可能であると言えます。

しかし、ここで私達は次のような矛盾に出会わざるを得ません。仮に表象に対応する物質的事象の全パターンを提出した場合、その提出されたパターンの諸要素に対応する各表象をもまた思考はこれまでの人生のなかで創り上げてきた表象とは別に新たに形成することになります。この時、提出された物質的事象のパターンの数と新たに形成された表象の数は一対一対応の関係にあります。それゆえ、提出された物質的事象のパターンの総数を、思考が形成し得るすべての表象の数が必ず上回ってしまう事になります。

「だが、提出された物質的事象のパターンに対応する各表象を構成している要素は他の事象の中にも見出せる抽象的な概念である。例えば、ある犬を認識した時、その犬に対応した表象は『茶色』、『毛』、『尻尾』などの抽象的な概念の組み合わせとして形成されている。しかし、これらの概念は他の犬や、ひいては猫においても見出すことができる。また、『1個のリンゴ、2個のリンゴ、...、100個のリンゴ、...』と無限に表象を得ることができるが、これらの表象は『リンゴ』や『自然数』という少数の概念の組み合わせから形成されている。以上のように、思考が無数に表象を形成できるからと言って、それを形成する要素としての単位的な概念も無数に存在するとは言えないだろう。よって、提出された物質的事象のパターンの数に対しては、思考が形成し得る表象の数ではなく要素となり得る単位的な概念の総数と比較するのが適当である。」

たしかにこのような異論が出てもおかしくありません。しかし、提出されたパターン一つ一つの間にはそれらを区別できるような差異が必ず存在しており、一つ一つのパターンにはそれと特定できるような特有の性質を認めることができます。少なくとも、各物質的事象のパターンに対応する各表象にはそれぞれの中に概念要素の特有の組み合わせの仕方を認めることができます。例えば、『1個のリンゴ、2個のリンゴ、...、100個のリンゴ、...』という集合を『「リンゴ、 $\times 1$ 個」「リンゴ、 $\times 2$ 個」...「リンゴ、 $\times 100$ 個」...』という小さな集合に分割した際、ある小さな集合における要素の組み合わせは、他の小さな集合を指し示す事なく、ある小さな集合のみを指し示すようにです。そして、この組み合わせり方を指し示す概念は、一つ一つを区別しそれと特定するために判断する際にはまるで個性を見出すかのようにそれを特別化する為の概念的要素として思考によって付与されるものでもあるため、先の比較は適当であると回答できるのです。

以上より、思考が形成する表象は物質的事象によって包括できるものではないことが判ります。すなわち、人間の思考という現象は物理的な現象に還元することはできない、ということです。よって、少なくとも人間の思考活動の原因は物理的な現象以外のところにも求められなくてはならないのです。

以上の見解は机上の空論に思われるかもしれませんが。なぜなら、脳に障害があることによって思考、記憶、などの精神活動にも異状が認められることは現在の認知心理学や脳科学の実験によって明らかにされているからです。この実験結果を見る限り、思考活動の原因は脳のなかに求めなくてはならないように思えます。それでもおそらく、この見解は純粋な実験結果そのものとは矛盾していないだろうと思います。このような実験は、任意の物質的な条件の下、被験者の知覚器官に対して物理的な刺激、もしくは物質的な事象を介在させて精神的な刺激を与え、それに対

する被験者の精神を原因とする反応としての物質的な事象を観察する、という態度によって行われます。そのため、その実験結果からは厳密には「脳における物質的な事象は精神と関係を有する」ということが明らかにされるだけであり、「人間精神が脳における物質的な事象のみによって発生している」と結論づけるには至りません。このような実験結果が厳密に人間の精神について明らかにできるものは、情報を主観において自我が認識し、精神を肉体によって表現する過程のうち、情報が肉体において経過していく時に生じる物質的な事象についてであります。情報を認識する精神における経過や、精神が肉体における現象として作用する経過については、精神内の物理的な現象と関係を有している領域についての解釈を提示するにとどまらざるを得ません。

脳において生じた活動電位が知覚内容に変換される瞬間を捉えた例はありません。また、自我は『私』という主観以外のところで認識を有することがない以上、たとえ何らかの条件によって他者が認識している内容自体を『私』が知覚できたとしても、その内容も『私』という主観において認識されるはずです。そのため、『私』にはそれが本当に他者が認識した内容自体なのか確認する術はないように思われます。つまり、自分が感じている『緑』と他者が感じている『緑』はまったく同じものであるかどうか確かめられないのです。それゆえ、現在の認知心理学や脳科学の実験によっては、肉体における現象と精神との直接的なつながりを明らかにすることはできず、精神の特定の部分内についての解釈を提示するに甘んじなくてはなりません。

それから、私は先の見解で「少なくとも人間の思考の原因は物理的な現象以外のところ“にも”求められなくてはならない」と述べました。それはつまり、私は思考の原因が物理的な現象にあることを全否定していないということです。むしろ、人間の思考には物理的な現象が利用されているということを認めております。ただ、人間の思考の経過には物質的な事象に依拠しない何らかのものとの関連を想定する必要性も認めていることをここではお伝えしたかったのです。そして、ここにも現代科学に基づく世界観に内在する論理的におかしなものが認められると思います。

「たしかに人間の精神については物質とは異なる何かを想定する必要があるかもしれない。しかし、人間以外にまでそのような何かを想定する必要性は、現実の世界を観察する限りまったく認められない。」

このような意見が出されることもあると思います。これまで、自然科学はこのような不可視的な『何か』を持ち出さずにも、無機物だけでなく、人間や動物や植物の生理現象や発生する過程を説明することができたからです。しかし、私達はここで何かを見過ごしております。たとえば、進化論における『性選択』や環境への『適応』といった概念には「“種が生存する上で有利になるように”形質を変化させる」という合目的性が包含されております。この合目的性の原因を自然科学は『本能』という言葉で説明します。しかし、本来この目的というのは主観における精神的な内容であるはずですが、自然科学が『本能』という言葉を使う場合、その目的をもつ主体が不明瞭なまま抽象化された概念の覆いのなかに隠されてしまっております。即ち、自然科学の言う『本能』とは抽象的な概念に与えた単なる名称であり、具体的な事象を明らかにするものではないにも関わらず、あたかも『本能』という言葉を持ち出せば事足りるかのよう私達が勝手に

錯覚していただけなのです。生理学においても物質の化学的な反応や物理的な現象によって説明を試みていながら、『本能』という抽象的な覆いで主体の存在が隠されながら各細胞や組織や器官に合目的性が持ち出されてしまっており、すなわち、物質の機械的な現象から得られる概念だけでは生物について説明するときには不十分であるのです。

また、『性淘汰』や『遺伝』の概念のなかには「能力の高い子孫を残し、種を存続させる」という目的が含まれておりますが、この目的をもつ主体について自然科学は「その生物に備わった『種の保存本能』」と抽象的に説明しているだけで、実体のないものとして扱われ具体性がないままに放置されています。これはしごく当然のことと思います。このような『種の保存本能』はその生物の個体の中では完結するものではなく、個体そのものにとっては不利益に働くことすらあるため、とても個体そのものの意志とは考えられないからです。ゆえに、このような『種の保存本能』はその生物の個体が誕生する以前から衝動としてその個体に植え付けられているものと考えなくてはならないのですが、その衝動を植え付けている本人を可視的な物質世界のなかに見出すことができません。私達にはこれ以上先に進むことができないため、『種』という抽象的な概念にその衝動の原因を負わせるだけで満足せざるを得ないでいます。このように、合目的性のある無意識的な衝動をすべて『本能』というまったく漠然とした抽象的な言葉の枠に自然科学が組み入れてしまったことで、あたかも十分に論理的に説明されたかのような錯覚が生じているのです。

以上から、偏見なしに真実に忠実であろうとするならば、このような衝動を個体に植えた本人、すなわち『種』という抽象的な概念に対応した精神的存在を想定する必要性はあると言えるでしょう。個々の生物だけではなく、それを構成する細胞や組織や器官、さらには『種』という不可視的なもののなかにも物質とは異なる何かを想定する必要性も認められるはずで、なぜなら、本能のなかにも含まれる諸目的も概念的形態を有しているため、少なくともその部分については人間における思考という現象と同様の性質をもっており、人間の思考同様、物質的な事象に依拠しない何らかのものとの関連を想定する必要性があるからです。

さて、これまで現代科学に基づく世界観に内在する論理的におかしなものを提示してきましたが、現代科学は非常に沢山の恩恵を人類にもたらしてくれていることを私達は認めなくてはなりません。この観察態度や概念には事物に即した概念を獲得しようという非常に真剣な人間精神の努力が凝縮されており、そこには真理を追究する情熱や人類の幸福を目的とした善意も沢山込められております。また、現代科学の観察態度や思考に向き合う態度には賞賛すべき慎重さと客観性が内在しており、また、現代科学によって明らかにされた概念にも素晴らしい真理が存在していることは疑うべくもない事実です。

世界を眺めたとき、私達は世界を構成している合法則的な物質のみを知覚します。しかしそれは、世界は物質のみによって構成されるという意味と等価ではありません。それでも私達の人体は私達自身が任意に作り出したものではなく、この世界を貫く法則性に従って物質から構成されております。それゆえに、自分自身を含めてすべては物質から成り立っている可能性を考えることもできるのです。ここで意識の問題が立ちはだかります。私達の意識は物理的な現象とは異

なり、よく“誤り”を犯します。また、自分自身で意志を選択することができます。つまり、私達の意識においては世界を貫く法則性が例外的に支配していないように見えるのです。それでも私達には、人間の精神においても世界を貫く法則性は生きてると仮定する方が理性的な見方であるように思えます。物質も精神も同一の宇宙から生じているものであるためどちらにおいてもこの宇宙を貫く法則が支配しているはずですし、少なくとも精神においてもそのような法則に貫かれている領域は存在すると仮定するのでなくては、精神について考察すること自体に意義がなくなります。ただ、現代の科学は、この精神についての考察を試みる時精神という主観的で非常に不明瞭なものを観察対象にすることに対して勇気を出せず踏みとどまってしまいます。いかにすればそこに誤謬が紛れ込まないようにできるのか、そこで見出されたものに対していかにして客観性を認めればよいかについて、知性による基盤が打ち建てられていないために不安と疑いが付きまとうからです。そして、検証不可能なものを懐疑的なもの、もしくは虚偽に等しいものとして考察対象から切り捨て、「混沌とした在り方をしている精神のなかにその精神自体を発生させるような合法則的な原因があるとはとても考えられない。おそらく何らかの機序により精神においては宇宙の法則が例外的な在り方をしているように“見える”のであろうが、精神の原因は物質のなかに還元されると考えるのがもっとも合理的である。」と言って、精神の原因を物質のなかに求めることを正当なものに見做します。

こうして「自分自身も含めてすべては物質から成り立っており、その現象の総体が『真実』である」という憶断が人間の思考を覆います。この憶断は物質が全事象の原因であるという思想へと人間の精神を導いていきます。なぜなら、観察の対象も判断の尺度も物質を仰いでいるからです。そして、人間の知性のなかで唯物論が座を得ることになります。

しかし、現代の科学という学問は物質的な事象の観察から得られる結果のみから見出された概念の総体である為、解剖生理学が人体に照明を当てるようには人間精神についての明確な概念を与えてくれることはありません。

唯物論には決定的な飛躍があります。「おそらく何らかの機序により精神においては宇宙の法則が例外的な在り方をしているように見えるのであろうが」と、その機序は何に即しているのか、その機序はどのようなものなのかについてまだ明らかにしていないのに、仮定として持ち出したものを真実であるかのように扱ってしまっており、論理的ではありません。それゆえ本来この仮定は、「精神の原因は物質のなかに還元できる」と結論づける根拠としては何ら力を持っていないものなのです。いくら精神が主観的で不明瞭なものであったとしても、懐疑的なもの、虚偽に等しい無価値なものとして切り捨てることは、認識の対象となっている世界の事象の一部を切り離すことになります。そのため、唯物論によって世界観を形成するというのは本質的には不可能です。唯物論は物質に即した現象のみを観察対象としているため、そこでは飽く迄も、時間上、空間上の物質間同士の関連のみが明らかにされるのです。精神については厳密には物質と関連する部分についての仮定を提示するにとどまらざるを得ません。すなわち、唯物論の観点は、慎重さと客観性を保つために自ら規定した観察態度によって、その有効範囲も制限されているのです。

以上から、真実に忠実であるためには、物質を観察する学問とは別に、精神自体を直接観察する学問も必要であることが判ります。そのためには、まず主観のなかで自分自身の精神を観察対象にすることを第一の出発点としなくてはなりません。これまで述べてきた内容は「精神は物質とは異なるものとして実在する」と証明するものではありません。ただ、物質的な事象には依拠しない何かを“仮定すること”は盲信ではなく理性的に可能である、ということを示すことはできたのではないかと思います。物質的な事象には依拠しない精神というものが本当に実在するのか、それとも精神というものの原因は物理的な現象に還元されるのか、という問題は、この精神自体を観察対象にする学問が現代科学と併存することによって初めて結論づけられ得るものになるでしょう。

このもう一つの学問の必要性は、現代科学の中でも僅かながら暗示されているように思います。相対性理論では情報は観測地点と対象の相対的な関係に依存すると言われます。例えば、観測地点から相対的に見てものすごい速さで移動している対象の長さは静止している時よりも短く観測され、その対象において生じている出来事は静止している時に観察する時よりも遅い動きとして観測されます。他にも、観測地点から相対的に見て物質の速度が光速に近づけば近づくほど、その物質は等加速度で運動していたとしても観測地点からは速度の上昇は緩やかになり、代わりに質量が増大するように観測されるなどです。よって、目の前に広がっている世界の同時性や、空間や物質の運動の普遍性は否定されることとなります。つまりそれは、観測地点を設けなくても時空間についての法則性を語ることは可能でも、具体的な宇宙空間の像について叙述するには観測地点について設定する必要があるということです。この事は、「唯一なる客観的な空間の中で一人一人が自己完結した存在として点在している」というのは私達の思い込みであり、実際の時空間はある存在においてそれ自体の質量や慣性系、加速度に依存した世界像として相対的な関係性に従い具体的に現れる、と語っているようです。比喩的に言うなれば、主観の存在において初めて空間は具体的な形姿を得るということです。

始め、私達は目の前の世界を『私』という主観なしにも変わらずに存在し続ける客観的な空間と思いながら、それを観察対象とする学問を客観的な真実についての学問と考えておりました。ところが相対性理論によって、実はそれらは主観についての学問であったと暗示されています。ただ、この主観のなかには客観的な真理が生きているとも告げられております。

人によっては、「前の文章で『私達が認識するものはすべて不確かなものでしかない』というまどろみについて述べた際、『はじめは感覚を根拠にしていたのに途中からそこで見出された論拠が根拠とすり替わっている』と言っていたが、同様のすり替わりが相対性理論の中にも見られるのではないか？」と思う方もいるかもしれません。ただ、相対性理論の場合は、脳科学や認知心理学における論理とは異なり、物質的な現象として観測されておりますし、条件を揃えれば感覚にも直接その様子が現れるであろう事柄です。偏見なしに見れば、相対性理論は観察対象に即して物理的な現象としてのみ語られており、人間の感覚に関しては何も語っていません。「空間は客観的で唯一なるもの」という思い込みを否定したのであり、感覚を懐疑的なものと扱ってはおりません。たしかに、世界の中に現れる現象として観察することからではなく、机上の数学的な考察から始めてはありますが、やはりそれを証明する根拠は論理ではなく、目の前で繰り広げ

られる物質的な現象の観測に置かれています。そのため、脳科学、認知心理学の成果を持ち出さずに物理学の範疇で語るならば、根拠を否定おらず論理は破綻していません。

精神を観察対象にするもう一つの学問は、相対性理論が暗示した「主観の中に生きている客観的な真理」に近づこうとする試みに他なりません。そしてこの時、精神には物質的現象に依拠しない領域がある可能性もあるので、この学問ではこれまでの自然科学の知識から一度自由になる必要があります。そして、新たに学問を構築していくつもりで先入観のない状態で主観における認識そのものを観察することから始められます。認識として意識に与えられているものを扱うとき、私達は感覚と内面的な精神を取り上げることとなります。この時感覚から出発し、それと関連する内面へと辿っていく事によって、自分の精神だけに取り組んだ場合に陥りかねない妄想への没入という危険性から私達の身を守る事ができ、かつ精神において生じる誤謬に対しても感覚を通して現実からは是正できる可能性を期待することができるのではないかと思います。

そこで、次章では認識そのものについて考察していきたいと思います。

第三章 認識についての再考（執筆途中）

第三章 認識についての再考

まず、自然科学によって与えられる概念を一度隅に置き、それとは関係なく、認識として現れている知覚内容そのものを観察しながら考察を始めていこうと思います。

現代の自然科学は、前章で述べたように、「感覚器官に対する外界からの物理的な刺激により活動電位を感覚細胞が発生させ、その電気的な興奮が脳の各感覚野にまで伝導、伝達されて連合野で統合されることで認識は生じている」という見解に立っております。しかしその結果、「目の前に机が知覚されているのだからそこに机があるのだ」というように現実の世界の姿として根拠に据えていた感覚を懐疑的なものと見做さざるを得なくなってしまう。この見解に立つとき、私達は、「目の前に机が知覚されているのだからそこに机があるのだ」と語るのと同じ根拠に従って「この世界の中に自分の身体があり、その身体の働きによって様々な感覚内容を知覚している」という判断を前提にしております。この章では、何らかの判断を下す以前の認識そのものを観察対象として考察を試みていくつもりなので、今回の場合にはこの前提からも離れることとなります。

認知心理学においても、「意識のなかの主体としての『私』はこの世に誕生したときは自他を区別することなく認識内容そのものと向かい合い、やがてこの認識が客観的な世界を映し出していることを理解して、その後自分の肉体の存在を理解する」という見解が見られます。つまり、身体というものは認識の総体の中から私という個体の実在を概念的に区別したものと言えるのではないかと思います。また、現時点においては、目の当たりにしている世界像を現出させる在りようを自己意識がしているから人間は自身の形を目に映る人体として認識しているのか、それとも人間が自然科学が述べる人体構造をしているから世界と身体が現在目の当たりにしている構造物として現れるのか、という問題に対して容易に結論を出すことはできません。これらのことから、「この世界の中に自分の身体があり、その身体の働きによって様々な感覚内容を知覚している」という判断を前提にせず認識について考察を始めることにも意義は認められ得るのではないかと思います。

それでも、この前提から離れたとしても、認識の中に現れているものがそのまま真実の姿であるのかどうかに関わらず、「認識されている内容と今『私』は向かい合っている」という事実は否定しようがないはずです。そこで、この「認識内容と今『私』は向かい合っている」という現象を出発点にしたいと思います。

この観点から出発するとき、最初に、認識されている内容と認識する主体としての『私』の2つが所与のものとして現れているのが認められます。この『私』と今認識されている内容の総体を今現在の意識と言えないのではないかと思います。ここで、認識されている内容のそれぞれを知覚内容と呼ぶことにします。知覚内容には外的なものとの内的なものがあります。外的な知覚内容とは一般に感覚と言われているものを指し、内的な知覚とは思考や感情や意志、衝動などの内面

を指します。

この外的な知覚内容は、視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触圧覚、温冷覚などのいわゆる五感と呼ばれている各感覚要素が統合されることで成り立っております。そして各感覚要素において、色彩、音、匂い、味、肌触り、圧力、温かさや冷たさ、痛み、肉体的緊張感や脱力感、平衡感覚などそれぞれの感覚領域を構成している素材のようなものが『私』に相對するように直接顕現しています。この直接顕現している素材のようなものを感覚素材と呼ぶことにしますが、つまり五感というのはこの感覚素材が生じるための各領域であると言えます。この感覚素材には色として現れるもの、音として現れるもの、匂いとして現れるものなど様々な種類がありますが、これらの種類は視覚や聴覚、嗅覚などそれぞれの感覚領域と対応しており、更に、感覚の種類ごとに独自の法則性がそれぞれの感覚素材を貫いています。例えば、青と黄色が混ざり合うことで緑が生じたり、赤と緑のような色相関における補色関係にある色同士が混ざり合うと元の色の明るさに応じて多様な明暗を持った灰色が生じたりするときの法則性は、『私』が欲する欲しないとは無関係に色彩を規定している視覚領域に固有のものであります。また、音階が周期的に現れることは聴覚領域に固有の法則性であります。すなわち、各感覚を支配しているそれぞれの法則性は、『私』には自覚できない仕方で『私』の意識に知覚内容が現れるように働きかけている『私』とは異なる何か由来していると考えられます。

知覚内容が現れるように働きかけているこの『私』とは異なる何かは、『私』にはその働きを認識することができない無意識的な領域から、知覚内容の法則性を完全に支配しながら『私』の意識が目覚めている間中ずっと強力な作用を及ぼし続けております。この作用は私が欲する欲しないに関わらず、正確さ、合法則性をもって半ば強制的に感覚内容を意識のなかに生じさせます。このことは、日常生活においていかに知覚内容が実際に行動するとき役に立っているか、また、今眺めている赤い花を『私』の精神だけで青い花に変えようとする事はいかに実現不可能な試みであるかということを考えれば容易に理解できます。『私』の精神だけではそれに対して、感覚器官を閉じたり、注意を向ける対象を選択したりする程度でしか関わることはできません。しかし、この感覚内容のなかには『私』は肉体と呼べるものも見出しております。この肉体は『私』がその構造を理解していなくとも『私』に応じて運動させられるため、皮膚で取り囲まれたこの領域を『私』は自分の体として他の感覚内容と区別しております。そして、この肉体を通して『私』は感覚内容に様々な変化を加えることができます。それでも、この肉体と呼べる領域の中においても他の感覚内容に見られる合法則性が同じ様に貫いているのが見出されます。更に、この肉体のなかに見られる感覚器官と五感などの各知覚領域とは直接的な関わり合いを有しております。すなわち、感覚内容は外界においても自分の肉体においても常に変わらずに合法則性に則っており、内面からの影響を受けない限りはそこに懐疑を向ける必要性は見られないと言えます。つまり、感覚内容自体は本来、それを生じさせる働きの中に間違いは入っていない信頼すべき正当な結果として扱っても問題はないのです。

そのため、感覚が私達を騙すのではなく、私達の判断がよく誤りを犯し自分自身を欺いていると考えるのが適切だろうと考えられます。なぜなら、私達が世界における法則性を思考によって

生み出しているのではなく、感覚内容を支配している法則性の一部を私達は感覚から見出せているにすぎないからです。感覚を懐疑的に扱うのだとしたら、私達が見出した法則性も懐疑的なものと見做さざるを得なくなります。更に、世界について何らかの判断を下すことも不可能なことになってしまいますし、日常生活においては感覚を疑うことに意義はございません。

「しかし、感覚器官や脳、神経系が傷害されることで感覚に異状が見られたり、特定の条件によって錯覚が生じたりする。ゆえに、感覚に誤謬が入り込んでいないと考えるのは適當ではないと思われる。」

このような反論は当然生じます。ただ、こういった異状は傷害されたところに応じて生じますが、その異状と傷害されたところとは内面からの影響が見られない部分については合法則的な関係にあるように思われます。また、錯覚においても、それを引き起こす条件と錯覚として生じるもの間に合法則的な関係が認められます。更に、私達の判断の誤りはその錯覚を引き起こす要因の一つにもなっております。これらのことから、純粹な感覚それ自体に誤謬が紛れ込んでいるのではなく、その感覚内容を正しく解釈できなかったところに誤謬の原因があると考えることができます。

たしかに、「目の前に机が知覚されているのだからそこに机があるのだ」というように感覚をそのまま世界の姿として根拠に据えることはできません。なぜなら、感覚をこのように捉えて根拠に据える場合、先の章で述べたように、この根拠から演繹された論拠によってこの根拠に内在している前提が否定されることになってしまうからです。この根拠にはすでに「世界は私の感覚に映っているままの姿をしている」という判断が前提のように含まれているのを見て取ることができます。しかし、感覚をそのまま現実の世界の姿と見做せないからといって、そのことは直接、感覚が自分達を騙している可能性を示唆するものではありません。感覚をそのまま現実の世界の姿としては扱えなかったとしても、地面に映る自分の影が自分の身体の形を合法則的に写し出した忠実な表現であるように、感覚を世界の真の姿の部分的な模像として扱える可能性が残っているからです。

「感覚は私達を騙しておらず世界の姿の模像として現れていることを認めたとしても、先の章で述べた『確かな真実に触れることは我々には永遠に叶わぬ夢なのだ』というまどろみに立ち戻ってしまうではないか。」

たしかに、感覚のみによっては世界の真実の姿に触れることはできない、という結論が覆ることはありません。しかし、それぞれの感覚素材そのものは以下のような意味で「正しく現れている結果である」と言うことができます。

まず、『私』が感覚を認識するとき、視覚や聴覚、味覚など諸感覚の具体的な知覚像を構成している感覚素材が『私』の前に直接現れます。それと同時に、『私』はその感覚素材を直接的に理解します。例えば、視覚において生じているそれぞれの色彩に対してそのままの色を意味として理解し、未知なるものとして恐怖を覚えたり混乱したりすることもなく、『私』は無条件にそれを受け入れます。すなわち、青い空を眺めたとき、その空に対応する真実の姿もその知覚された通りの色をしているのかどうかは判りませんが、今日の当たりになっている青そのものは、認識と同時に正確な理解が伴った対象でありながら『私』にまったく由来しない合法則性に正確に支

配されている点で、真実の世界の中で働く色彩の本質と全く同質なものの直接的な顕現として扱われるべきものだと言えます。なぜなら、知覚とともに理解もされてしまって直接懐疑の目を向ける対象とするのが不可能な所与なる体験であるからです。

更に、この青はその合法則性に則って『私』の意識に直接生じているため、『私』が空を青として知覚していることも正当なものに見做せます。ただ、私達の意識にとっては「なぜ『私』は空を青という色彩で知覚したのか」を正しく解明しなくては空の真実の姿には辿りつくことができないということです。網膜で光の波長を感受する錐体細胞の異常や欠損により色覚に異常が生じることは現代科学の観点から認められますが、「なぜ空をその色として知覚したのか」を解明したときに私達の前に現れる空の真実の姿は、色覚に異常があるか否かに関わらず、おそらくどの人にとっても同一の普遍的な姿をしているのではないかと考えられます。なぜなら、感覚において『私』の意識に対して無意識的な領域から働きかけている何かが支配している合法則性は、現実としての1つの世界を共有させる体験をすべての人の意識に生じさせているからです。ゆえに感覚素材そのものは、真実の世界における本質と同質のもの現れであり、また、その統合のされ方についても懐疑的になる必然性を示す決定的な根拠は全くありません。

ただ、『私』の前に現れている感覚素材、感覚内容は、認識する精神的主体としての『私』自身の存在そのものに関しては直接的には何も示しておりません。感覚は客体として現れる対象についての情報の一部を、感覚素材を組み合わせることによって『私』の前に示すまでに留まります。自分自身の肉体も、それぞれの感覚領域を支配する法則性に従って肉体自体についての情報として現れた内容から構成されているので、ここでは対象の側に含めています。自然科学も、人体を構成している原子は新陳代謝によって10年後には全て異なる原子に置き換えられると主張しているように、『私』という存在の持続性に対応する物質素材はないと言えることから、このように肉体を『私』という存在そのものとは異なる対象のように見做す観点も可能なものだと思います。そして、これらの対象は『私』とは異なるそれ独自の固有性を有しており、『私』は対象に対して、自分勝手な変化を加えることはできず、それ独自の固有性が属する合法則性に従う形で変化を与えることが可能なだけの非我なるものとして向き合っています。すなわち、対象とは元々、『私』自身ではない不可解なものであり、働きかけるときに抵抗が生じるものがあります。ただし、自らの肉体の運動においては、自分の意志がどのように肉体に作用しているのかという具体的な過程を知覚することが自我にはできませんが、その結果として生じる運動は人体構造の法則性に則りながらも意志を裏切らない形で生じております。

このように『私』の意識の内に直接現れているものは、この不可解な非我としての対象と感覚素材とから構築された、自分自身を含めた世界像であると言えます。つまり、日常生活における『私』の意識という盤上では『私』の活動の他に、世界像を主観の前に現出させる『私』には知られていない働きが、実際にしかも強大な力をもって活動していることを認めなくてはなりません。そしてその中から空間的な対象同士の関連や、ある対象の時間的な前後の関係を思考によって見出したものが物理法則と呼ばれています。それゆえ、物理法則とは対象の本質について説明したのではなく、対象同士の相対的な数学的な関連を示す関数である、とすることができ

ます。この関数においては、対象の本質は変数の部分に相当しますが、変数は抽象的な数字として代入されるだけですので、物理学によっては対象の本質について明らかにすることはできません。たしかに、物理学は対象の構造の解釈モデルを提示することができますが、そこで説明されているのは「ある対象は、より小さな対象と、さらに別の対象の数学的関連から構成される」というように対象同士の関係性についてであり、対象自体の本質についてはありません。それでも私達の思考は、無意識の内から世界像を現出させる働きが支配する法則性を、人類の歴史の中でいくつも見出してきたことに変わりはありません。よって、私達の思考はこの無意識の内にある働きとの密接な関係を有していると考えることができます。

つまり、この無意識内の働きは、感覚素材において世界の真実の姿として打ち明けられるものと同じ本質を用いているように、思考に対しても懐疑の対象とはなり得ないような何らかの作用を私達の意識に与えている可能性が考えられます。そこで今度は自分自身の思考体験に目を移してみたいと思います。

自分自身の内面を観察すると思考体験は、自らの思考活動と、それによって生じる思考内容という知覚される客体とから成り立っていることが判ります。この思考活動においては、意識と対立するような衝動に従わせられてしまうこともあります。自由な意志に基づいて動機を決定しながら意識的に活動させる思考の様式を“考える”という能動的な行為における本質的な性質として『私』という主体は感じます。そのため、望ましくない衝動が『私』に従わせようと働きかけてくる場合、『私』はその衝動に意識的に対抗し、十分な力があれば内的な力を用いてその衝動を鎮めようとします。ただし、この場合の自我によって動機を決定できる自由とは、無秩序なもの、完全に合法則性から離れたものに動機としてならば『私』をいくらでも引き連れていくことができるという意味ではありません。動機もその在り方については衝動と同様の存在様式をしており、衝動として存在し得るあらゆる可能な様態から外れた在り方はできないからです。

『私』は自らの内に動機を据える際、まずその動機が自らの自己肯定感を損なわせないかどうかを検討します。そして動機が、自身が深く納得できるもの、道徳感情に親和するものであった場合、自己肯定感が特に賦活されます。その為、『私』は自らの動機としては自身が深く納得できるもの、道徳感情に親和するものを自身の中心に生かそうと欲します。思考領域において望ましくない衝動が作用してくる場合は、自己肯定感を損なわせないように思考に関する道徳感情を以てその衝動と対峙します。思考に関する道徳感情には、論理的な慎重さ、注意深さ、冷静さ、公正さ、厳密さ、忠実さなどといったものがございます。自我はこれらの道徳感情から論理的に思考をしようという衝動を道徳感情の発達度合いに応じて自らの内に生かします。このように、動機を自ら決定することができる自由は、より完全に遂行されるほどに、思考を身勝手なものから真理に即する厳密なものへと促してくれるようになっていきます。反対に、自我が意識的に思考の舵を取ろうとせずに盲目的に衝動に従わされるならば、『私』は合法則性から離れた無秩序なもの、混沌としたものへと流され易くなります。それでも、この場合の無秩序や混沌もこの宇宙に存在することが可能な様態として予め規定されている範疇の外にまでは出ることはないと考えられます。因みに、ここで用いられている“自由”とは、直接現れている認識そのものを観察対象と

した際の飽く迄も体験として感じられるものの意味であって、哲学における「自由」の概念について言及したものではありません。

さて、『私』は自らの動機を据えながら思考内容を意識の中に形成しようと、まるで暗い中を手探りするように活動します。自我は思考をしている自分自身というのが具体的には知覚できず、活動の結果として生じた思考内容をただ知覚するだけである為、具体的に自分はどんな事をしていたのかを知ることはできません。この、“自らの活動は知覚できず、それによって生じた結果を認識する”という関連は、意志とそれに応じる身体の運動との関係においても見られます。

ここで、「ならば、なぜ自分自身の活動が知覚できないにも関わらず、意識は自らの意志によって思考をしていると自覚できるのか？」という疑問が出てきます。その疑問に対しては、自分自身の発意を声を出し始める時の感覚に似たものとして漠然と微かながら知覚しており、且つ、その発意に応じた思考内容を結果として知覚できている為だ、という理由を一つには挙げられるかと思えます。ただし、発意から結果として現れる知覚内容が生じるまでの具体的な経過については把握することができていない事に依然として変わりません。不明瞭なまま、何となく『私』は行っているに過ぎません。ただ日常においては、思考活動の具体的な経過を理解せずともあまり問題なくやり過ごせているだけです。しかし、発意と結果としての思考内容の知覚だけではまだ「自らの意志によって思考をしている」と自覚するまでには至りません。自分自身の動機を自ら決定できる状態になくはこのような自覚は生じないからです。例えば、普段見る夢の中では、そこで見るイメージに応じて生じてくる感情や衝動に自分の思考や行為が促されてしまい、“『私』は自らの意志に基づいている”とは感じられません。このように、自らの内の感情や衝動からの強制力に対抗できる状態でなくては自我は“『私』は自らの意志に基づいている”と自覚できません。

『私』が自らの動機を決定する為にはその動機を『私』自身が認識している必要があります。そうでなくては『私』は、その動機に基づくか、あるいはその動機に基づく事を止めて他の動機を据えるかを選択することができません。そして、動機とは形が知覚できない幾つもの衝動の中から選択されて『私』の内に据えられた衝動でもある為、それを認識する際は、イメージや概念として一度知覚可能な形にしてその衝動の性格を把握しようと試みられます。思考内容は、形が知覚できず『私』の行動を強制しようと作用できる力を持った感情や衝動と違い、感覚に較べれば固定化されず薄らいではいるものの一時的に出現した結晶のような静かな在り方をしています。そのお陰か、衝動が思考内容として把握される際、思考している主体はその衝動についての思考内容に対して自身ではない非我なるものとして向き合う事ができています。即ち、思考内容が上記のような静かな在り方をしている事で、思考内容は内的な知覚であるにも関わらず、それを感覚における形ある対象のように眺めることが可能になっていると考えられます。

また、この事は思考内容を作り出す思考活動に関して、思考を認識する主体と、思考活動する主体とに区別され得る事を示唆しています。衝動の性格の把握を試みる場合、まず思考を認識する主体の前に一度衝動が対象として置かれ、思考活動する主体はその衝動を内に感じつつ言わば一体となりながら思考内容を作り出します。日常の目覚めた意識においては、感覚が思考よりも

強い強度で知覚される為、認識する主体が思考活動する主体から引き離され、感情や衝動とも対峙できるようになっていると思われます。そしてこの事によって、“『私』は自らの意志に基づいている”と感じる事が可能になっているのではないかと考えられます。

さて次に、『私』が形成する思考内容に注目すると、思考内容には2つの側面があることが判ります。言語を例として採り上げてみますと、一つは「愛」「love」「amour」などの様々な言語で表現されたそれぞれの言葉としての側面であり、もう一つは、これらの言葉が共通して指し示している概念の意味としての側面です。それぞれの言葉は完全に一致した意味を指し示してはならずそれぞれ多少異なるニュアンスを有していたとしても、意味の主要な部分は少なからず一致しているのでその差異については今は採り上げませんが、ここで指摘しておきたい事は、思考内容は、この場合では言葉として表現されたものと、表現されることを待っていた意味自体とに区別することができるという点です。すなわち、思考内容には意味自体とその表現という2つの側面があるということです。この2つの側面を以降は「意味自体」と「イメージ」と呼ぶことにしたいと思います。

まず、この意味自体について少し考察して大まかな性格付けをしておきたいと思います。この意味自体に注目すると、その知覚の仕方は他の知覚内容の知覚の仕方とは非常に異なった特殊な在り方をしていることが判ります。他の知覚に対しては『私』はそれを自分自身とは切り離して他者なる客体として向かい合うことができますが、意味自体に対しては、自我はそれとまるで同一化してそれを形のない内なる抽象的な内容として包括することができるだけであり、その意味自体についての明瞭で具体的な認識は日常の意識には現れません。この意味自体が多少なりとも具体性をもったイメージとして作り出された時に、『私』はそのイメージと向かい合うことを通して意味自体を自覚しています。また、先に「動機とは形が知覚できない幾つもの衝動の中から選択されて『私』の内に据えられた衝動でもある為、それを認識する際は、イメージや概念として一度知覚可能な形にしてその衝動の性格を把握しようと試みられ」る、と述べましたが、衝動についてのイメージや概念を形成するという事は、衝動も意味自体として捉えられる側面を有しているという事でもあります。このような把握のされ方は感情についても同様に当て嵌まり、『私』がそれを把握する際はその感情と密接に関連した意味自体も同時に自覚されます。これらのことから、「この意味自体というものは認識における知覚内容すべてと関連しており、認識において中心的な働きを為している」と言うことができるかと思えます。

(続く...)